

関ヶ原の合戦 ifワールド

もし、小早川秀秋の裏切りがなかったら歴史はどうなっていたらだろうか…？〈中編〉

前号の〈前編〉では、小早川秀秋の裏切りの背景を考察しながら、関ヶ原合戦を史実に沿って捉えてみた。

今回のifワールドは、前編の史実に基づいた話と常に比較しながら、お読みいただいくとおもしろいと思う。実際の史実との比較が本シリーズの醍醐味と筆者は考えている。

歴史とは、「温故知新」の宝庫である。現代に生きる我々

は、歴史（先人の生き様）にもっと学び先祖に対し感謝のこころを持ち、その努力と犠牲のお蔭で「今・この時」があることを認識しなければならない。

そして、読者自身の生き様も後々の読者の子孫にとって先祖の歴史として語り継がれてゆくことを意識しながら、我々は生きてゆかねばならないと思う。

〈小早川秀秋が裏切らず東軍を攻撃していたら、その後の戦局はどうなっていたらだろうか。〉

図1 午前8時頃の布陣図（開戦直前）



1 小早川の叛意

家康の本陣に、正午頃伝令が血相を変えて飛び込んできた。

「殿、大変でござります」

このとき、家康はほぼ勝利を確信し戦後の仕置きを考えていた。「小早川秀秋勢が、突如動き出し、福島正則勢・京極高知勢の背後を攻撃してきております。これにより福島・京極勢奮戦中なれど、壊滅は時間の問題となっております。また、各軍の陣形は乱れ、兵の中には敗走し始めておる者までございます」

家康にとっては、まったく信じ難い報告であった(図4参照)。
「なんじゃと。それは^{まこと}真実か」

家康は即座に陣幕より飛び出して松尾山を睨み付けた。その目の前には小早川軍一万五千の大軍は、福島勢攻撃隊と家康攻撃隊の二手に別れていた。その家康本陣攻撃隊は怒涛のごとくこちらに向かって下山していた。

「おのれ秀秋、無礼たまねをしおって。この家康を愚弄する気か、許さん！」

家康は近侍（この近侍は、大垣藩の藩祖氏鉄の父である戸田一西である）に向かって

「本多忠勝はどうしておる」

この本多忠勝なる人物は、後に徳川四天王と云われた直参の勇猛な武将である。家康としては、頼りがいのある忠臣である。

実は、大半の家康直参の精銳部隊は秀忠が率いる三万七千の軍勢に従軍していた。現在彼らは上田の真田攻撃に手間取り、未だ馬籠辺りであり、関ヶ原に到着できない情況にあったのである。戸田一西は

「本多忠勝殿・井伊直政殿が小早川軍に対して必死の奮戦をしております。また福島殿・京極殿は背後を突かれ、消息は未だ掴めませぬ」と報告した。

黒田長政・細川忠興・加藤嘉明の軍勢は、石田三成の重臣、島左近や小西行長勢と奮戦中につき、到底救援に

図2 午前10時頃の布陣図（開戦後2時間経過）



岡ヶ岳の合戦ITワールド
もし、小早川秀秋の裏切りがなかったら歴史はどうなっていたらうか…? (中編)

差し向ける余裕などはなかった。奮戦中の東軍の兵たちにも、松尾山の小早川勢が家康本隊方面目掛けて下山しているのが、手に取るようにわかった。これは何を意味しているのかは、一介の雑兵にもおおよそわかっていた。当然、東軍の攻撃の勢いはなくなつた。東軍の雑兵の中には、戦線を離脱し逃げようとする者まで出だしていた。

2 家康の憂いと決断

家康は、窮地に陥った時には、かならず行う癖がある。それは、自分の爪を噛む行為である。家康は自分の爪を噛みながら

「小早川秀秋を甘くみておったわい。三成め、余程の好条件を出したとみえるな」

形勢は、みるみるうちに西軍優勢になってきていた。爪を噛み今後の方策を考えていた家康の脳裏に次の事が足かせとなり、あせりと危機感を湧き上がらせていた。

- 1.ここで決して死ぬわけにはいかない。
- 2.しかし、現時点では毛利輝元が大坂城にいることは、すなわち秀頼公を手中にしていることであり、天下の公儀(行動の正当性)は三成方にある。

自分が賊軍となっている現状では、このまま逃げて総大将が戦線を離脱することは、例え生き残っても味方してくれた大名諸氏への信義と道理が立つまい。ここは、討つてやるかとあれこれ考えていた。そこへ、一騎の馬が本陣に駆け込んできた。井伊直政である。

「殿、ご陣払い(撤退すること)をなさりませ。本多忠勝奮戦中なれど、多勢に無勢、敗退も最早時間の問題でござります。まずは、岐阜城まで撤退し秀忠公の軍を岐阜城で待たれ、合流なさるが得策かと思います」

「ええい、うるさい! わしの手勢三万で秀秋など捻り潰してくれるわ。どけい直政!」

と井伊直政を押し倒した。家康は18歳の小倅に諂られたことで、通常の冷静さを失っていた。それでも井伊直政

は、今にも自ら戦場へ飛び出そうとしている主君の腰にしがみ付き食い下がった。

「殿、ご短慮はなりませぬ。いま、小早川の参戦で西軍は勢いを増しております。ここは、無理は禁物でござります。一旦撤退し再起をはかるべきかと存じます。家康公本隊三万と秀忠公の率いる三万七千の軍勢が、我が徳川にはございますことを、お忘れなされませぬように願い奉ります」と身を挺して家康を説得した。

「総大将が真っ先に逃げるのは、末代の恥辱。例え生き延びても小心者かつ卑怯者と蔑まれようぞ」

「戦さというのは、時の運でござります。殿のお命さえあれば又再起も可能でござりましょう。豊臣家臣団同士の“内輪揉め”に、どうして徳川が犠牲になる必要がござりましょうや。冷静に情況判断をなされませ。殿だけでなく、この恥辱、家臣一同耐え忍びますゆえ、ご陣払いを」と直政は諫めたのである。家康も直政の必死の諫言に、すこし冷静を取り戻した。

「おのれ三成め。運のいいやつじゃ。ひとまず岐阜城に撤退する。馬を引けい」

当初よりこのような状況をも想定して後詰に一万五千もの軍勢を配置していたことが効を奏した。

撤退と決まれば、南宮山の毛利勢が動く前に岐阜城まで引かねばならなかつた。井伊直政は、伝令に命じた「後詰の有馬・山内・蜂須賀・浅野・池田に対して早馬で以下のように伝えよ。小早川の裏切り(小早川の家老稻葉氏より、内々に東軍にお味方すると連絡を受けていた)により家康公は一時、岐阜城まで撤退される。毛利勢を牽制し家康公を無事岐阜城まで援護せよとな」これを受けて伝令は散つていった。

3 西軍の反転攻勢と東軍諸将の末路

家康本陣の撤退を知った西軍諸将は、勢いづいた。一方、石田三成勢と戦っていた黒田・細川勢には大きな動搖が走つた。黒田長政の陣中では

「家康は、小心者なり。我らを見捨てて早々に撤退とは何

たることぞ。我らもここでの打ち死は御免でござる。とりあえず岐阜方面に撤退する。部隊に伝令せよ。陣払いじゃ」と言って早々に兵を引き上げさせた。

しかし、石田三成の家老である島左近の追撃はすさまじいものであった。島左近は
「黒田と細川の首を取れい。取ったものには恩賞はいいなりぞ」と言って、家臣を鼓舞していた。

黒田長政は、半数以上の部下を失いながらも辛うじて山内一豊の軍に合流できた。山内一豊は
「黒田殿、よくぞご無事でおられた。お怪我はなさっておりませぬか」

と黒田長政を気遣った。

「山内殿、かたじけない。おぬしと会えて命拾いをしたわ。しかし、すぐに石田勢が追撃してまいるはず。早々に撤退をなされよ」

「ご心配ありがたく存する。しかしながら、我々は南宮山に陣取りし吉川勢・毛利秀元勢と決戦する所存でござる。黒田殿は前線で大激戦を繰り広げられた。家康殿もご満足のはずじゃ。我々には与えられた使命がござる。ここは、我々にお任せいただきたい。岐阜城でまたお会いしましょう」「山内殿、東軍の総大将の家康殿が真っ先に逃げ出すとは言語道断の所業じゃ。我らは家康の家臣ではない。上杉討伐という秀頼公のご意志で、家康に合力したこと。ここで命を落とすは無駄死にぞ。お命を大事にお考えあれ。されば早々に戦線を離脱し、ひとまず岐阜方面に撤退をお勧めいたす」

「しかし黒田殿。この山内にも武人としての意地がござる。黒田殿は岐阜城での次の決戦に備えてください、我々の名跡を残すにはこの戦さに勝つしか道はござりませぬ。負ければ黒田殿もわしも三成は許す事はしないはず。我々は斬首となりましょう。お覺悟をなされませ」

「そうであった。まさにその通りじゃ。もはや賽は振られておる。あいわかった。また、岐阜城で会おうぞ」

と言って岐阜城に退却していった。山内一豊は、家臣に対し
「我々は、今から毛利勢・吉川勢と交戦することとする。山内の勇猛さを毛利勢に見せつけてくれようぞ。気を引き締めてひとつでも多くの敵の首を取れ」

と家臣の士氣を鼓舞した。

一方、細川忠興の陣中では

「小早川秀秋め謀りおったな。家康に味方するはずと心得ておったが、この機に裏切るとは武人の恥さらしじゃ」
そこへ忠興の前に物見が駆け寄ってきた。

「殿、前方の島津勢が動き出してござりまする」
「やっと動き出したか。たぬき爺め。一戦交えようぞ」

今まで東軍の攻め手の攻撃に対して露払い程度に参戦していたものの、積極的には攻撃を仕掛けてこなかった島津勢であった。西軍優勢とみて細川勢目掛けて攻撃を開始したのである。

「殿、島津がこちら目掛けて攻撃してまいっております。我が軍は、浮き足立ち敗走しておりますゆえ、ひとまず退却が肝要と心得ます」

と重臣たちが進言してきた。しかし、行く手には毛利勢の攻撃が予想され、困難極まる撤退になることは必定であった。このとき忠興は、死を覚悟した。わしのため死をもって武門の信義を示したわが妻、細川ガラシャの顔が脳裏に浮かんだ。ガラシャよ申し訳ない、と来世で謝りたいと思った。そのとき
「殿、今ご着用の陣羽織と大将を示す馬印の旗指物をお借りしようとございます」

こう言い出したのは、実弟の細川幸隆であった。

「私が、兄者を名乗り島津軍を引き付けますゆえ、この間にお逃げください」

と言ってのけた。忠興は

「ならん。ならん。お前を犠牲にして今後生きてゆけようか。ならん」

この強硬な忠興の拒絶に対して、幸隆は
「ここで、兄者が討ち死にしたのでは姉上（細川ガラシャ）も、浮かばれませぬ。また、細川の名跡は、必ず兄者が継がねばなりませぬ。私がその捨石になれますならば本望でござりまする。誰か兄者をお連れ申せ」

とむりやり馬に乗せ脱出させた。兄の脱出を見届けると細川幸隆は

「我こそは細川忠興なり。手柄が欲しくばいざ勝負いたせ」と言って島津豊久の陣に30騎程で突撃を敢行した。しかし、

関ヶ原の合戦百ワールド
もし、小早川秀秋の
裏切りがなかったら歴史は
どうなっていたらうか…? (中編)

多勢に無勢、薩摩武士に囲まれ鉄砲7発、矢9本を受けあえなく落馬したところを、槍で突かれ首を取られてしまったのである。けれどもまさしく、室町時代より続く名家の血筋を引いた幸隆の壯絶な最期であったと言えるであろう。

この後、すぐ忠興と面識のある豊久が首を検視したところ、忠興ではないことが判明したため、直ちに豊久は騎馬隊を主体とした追撃を命じた。

一方、福島正則軍は、宇喜多軍の総指揮官の明石全登の巧みな攻撃に苦しめられていた。宇喜多軍には、一兵卒として若かりし頃の宮本武蔵も参戦していた。福島正則は歴戦の武将であって、宇喜多軍の三分の一にも満たない軍勢で互角に戦っていた。そこへ、小早川軍一万五千の大軍が背後を突いてきたのである。正則は

「おのれ、秀秋、いまごろ動き出すとは卑怯者め。わしの槍で殺してくれるわ」

と言って、自らの軍を反転させ小早川軍に対し突進を命じた。しかし、時すでに遅し。東軍は大混乱におちいっており我先と正則勢は敗走していたのである。たちまちの内に正則は宇喜多兵と小早川勢に囲まれていた。正則はここで初めて自分の最期を悟ったのである。

「我こそは、左衛門尉福島正則である。槍に心得あるものは勝負いたせ」

と叫んだ。そこへ

「おお～。福島殿、拙者がお相手仕る」

「お主は、秀秋の付家老になられた松野道円殿ではないか。久しいのう」

「お久しうござります」

「道円殿なら、わしも望むところじゃ」

もともと松野道円も秀吉の家臣で、秀吉の命で小早川秀

秋の付家老になっていたのでお互い旧知の仲であった。

「いざ、この天下一の正則の槍を受けてみよ」

と正則は、頭上で槍を回転させ道円めがけて左から右へ

槍を振り下ろした。道円も辛うじてこれをかわし正則の振り

下ろした槍の上から、正則の首筋目がけて槍を突き出した。

正則はのけ反りながら辛うじて馬上でかわした。

「道円、腕は鈍っておらぬようだな!」

正則は振り下ろした槍を今度は下から上にたすきがけに振り上げた。そのとき、ひとりの足軽が突如正則の腹を突いた。松野道円は

「ばか者、これは一対一の勝負ぞ」

と味方であるが横槍を突き出した足軽を一刀の下に切り殺した。正則は、戦いの疲れも手伝って落馬した。そこへ、味方の足軽たちが正則の首を取ろうと近寄ろうとした矢先、道円は「近寄るでない」

と命じた。そして、自ら下馬し正則の体を抱きかかえ頭を膝の上にのせた。

「正則どの。しっかりせい。死ぬでないぞ」

「道円殿、わしの首をとって手柄にされよ。こうしてお主と敵同士になるとは思ってもみなんだ。昔はよく一緒に槍の稽古をしたもんだな。懐かしいぞ」

松野道円は涙が止まらなかった。

「お懐かしゅうござります。正則殿にはこの道円、槍をよく教えていただきました。この道円、感謝しております」

「道円殿、この正則決して秀頼公に弓を引くつもりで、家康に味方したわけではござらぬ。豊臣家のために上杉討伐に参加したまで、信じてください」

「わかっております。正則殿の豊臣家への忠義、この道円が一番存じております。お気をしっかりおもちなされよ」

「道円殿、秀頼公をよろしくお守りください。お頼み申す」と最期の力を振り絞りこう言い残すと正則はついに息絶えた。正則は道円にとって槍の師匠であった。まだお互い若かりし頃よく共に槍の指南を受けた間柄であった。

「正則殿! 正則殿! 死んではなりませんぞ。秀頼公をお守りするのは正則殿以外にはござりませぬ。死んではなりません。あ～、無念でござる」と道円は号泣した。

道円は家臣に命じて正則の遺体を戦場より運びだし、手厚く葬った。そして後日、道円は福島正則の陣のあった場所に墓を建立している。

小早川軍の思わぬ参戦により、京極高知も藤堂高虎も背後を突かれ奮戦むなし討ち死にした。このようにして東軍の前線部隊は壊滅した。これによって東軍は総崩れとなり、ここに西軍の大勝利が確定したのである。

図3 午後1時頃の布陣図（開戦後5時間経過）※史実に基づいた布陣図



図4 <ifワールド>午後1時頃の布陣図 ※史実に反し、もし小早川秀秋が東軍を攻撃した場合の布陣図



関ヶ原の合戦でワールド
もし、小早川秀秋の
裏切りがなかったら歴史は
どうなっていたらうか…? (中編)

4 家康の敗走

石田三成をはじめ宇喜多・大谷・小西・島津勢は、一気に家康の息の根を止めるべく、全軍を挙げて追撃した。そこへ毛利勢も加わり五万の大軍になっていた。

しかし、東軍の後詰の諸将(有馬則頼・山内一豊・蜂須賀至鎮・浅野幸長・池田輝政)はしんがり(退却や撤退の際、撤退する軍隊の一番最後で命をはって背中に敵の矢や銃弾を受けながら追撃を防ぐことを役目とする。全滅もありうる一番危険な役割である)の務めを無事果たし家康を岐阜城に逃げ込ませることができた。しかし西軍にとっては家康を撃つ絶好の機会を失ってしまったのである。

さすが家康。戦巧者である。敗戦を想定した布陣を組んだ家康。もし強力な後詰を用意していなかったとしたら、おそらく退却中に落命していた可能性が高かったであろう。

戦う前から関ヶ原合戦の戦いの意義を、しっかりと認識していた上での戦略を組める大将は家康以外、全国にまずいなかったであろう。家康は退路を重視した布陣を組み、負けても豊臣恩顧の大名たちの戦力を削げればよいという天下取りの第一歩としての位置づけで関ヶ原合戦に臨んでいたのである。だからこそ、この合戦で決して死ぬわけにはいかなかったのである。

また、家康がこの戦いで注意したことは

1.この戦いを、絶対に豊臣対徳川の戦いにしてはならない。なぜなら徳川は豊臣政権の筆頭大老の立場から、豊臣家に弓引く逆賊(三成)を成敗するという大義名分をもって、豊臣恩顧の大名を味方にする必要があり秀頼公の名代として、振舞う必要があった。

2.豊臣秀頼や毛利輝元が関ヶ原に向け出馬する前に、決着をつけねばならない。これは、天下の公儀(主君である豊臣家が与える行動の正当性)が、西軍にある事を東軍の豊臣恩顧の武将が知ってしまうと、家康を裏切る可能性が格段と高くなる事態を招くことを恐れたためである。

あくまでも主君は、豊臣秀頼である。西軍として秀頼公が出馬することにより、今は三成憎いで集まっている東軍の主力部隊が、家康に味方する大義名分がなくなり、西軍側に寝返る危険性は十分有り得る情勢にあった。

実際の史実でも、家康は豊臣家を滅亡させるまでに15年を要している。また関ヶ原合戦の勝利後、大坂城の秀頼公に戦勝報告として実際に登城している。このことは、家康はたとえ関ヶ原合戦で勝っても豊臣家の臣下であり、豊臣家の大老として逆賊石田三成を討ったのであるということを諸大名に知らしめ、天下を家康が乗っ取ることの警戒心を解かせることを意図してのものである。

豊臣政権の筆頭の大老であっても、「あくまでも秀頼の臣下である」との認識が大半の大名の家康に対する共通認識であった。だからこそ後の徳川政権を磐石なものにするのに、15年という長い期間がかったのである。

家康はこの点を十分に認識していたはずであり、関ヶ原合戦で勝利しても天下の形勢はあまり変わらず、豊臣家の権威は保たれていたのである。そこでその後家康は、慎重に秀頼の権威を落としめる戦略を立て実行していった。

家康もまさか豊臣家を潰すのにこれ程までかかるとは思ってもいなかったであろう。しかし、秀忠では豊臣家の威光を覆す力量がない。だから磐石な徳川幕藩体制の確立を、自分の存命中になんとしても成し遂げねば徳川の天下はないことは、家康が一番認識していたと思われる。

結果論ではあるが、15年も時代が経過すれば各大名も世代交代が進み、次の世代が秀頼にあまり恩顧を感じていなくなっている。この意識変革が家康に運をもたらし、大坂冬・夏の陣が成功した原因の一つとも言えるのである。家康がもっと早く死去していたら豊臣家は生き残り、違った歴史が展開していくだろうと筆者は思っている。

図5 午後2時頃の布陣図(開戦後6時間経過) — …島津義弘の退却経路

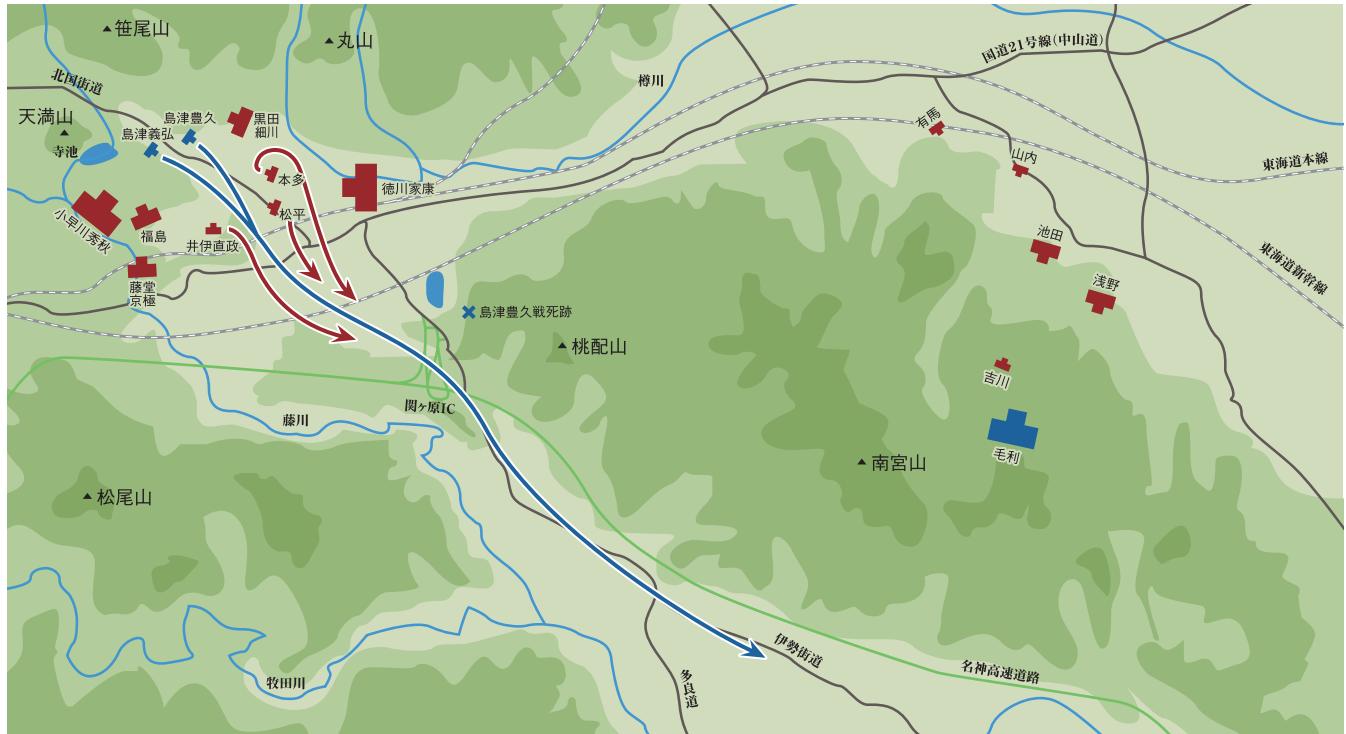
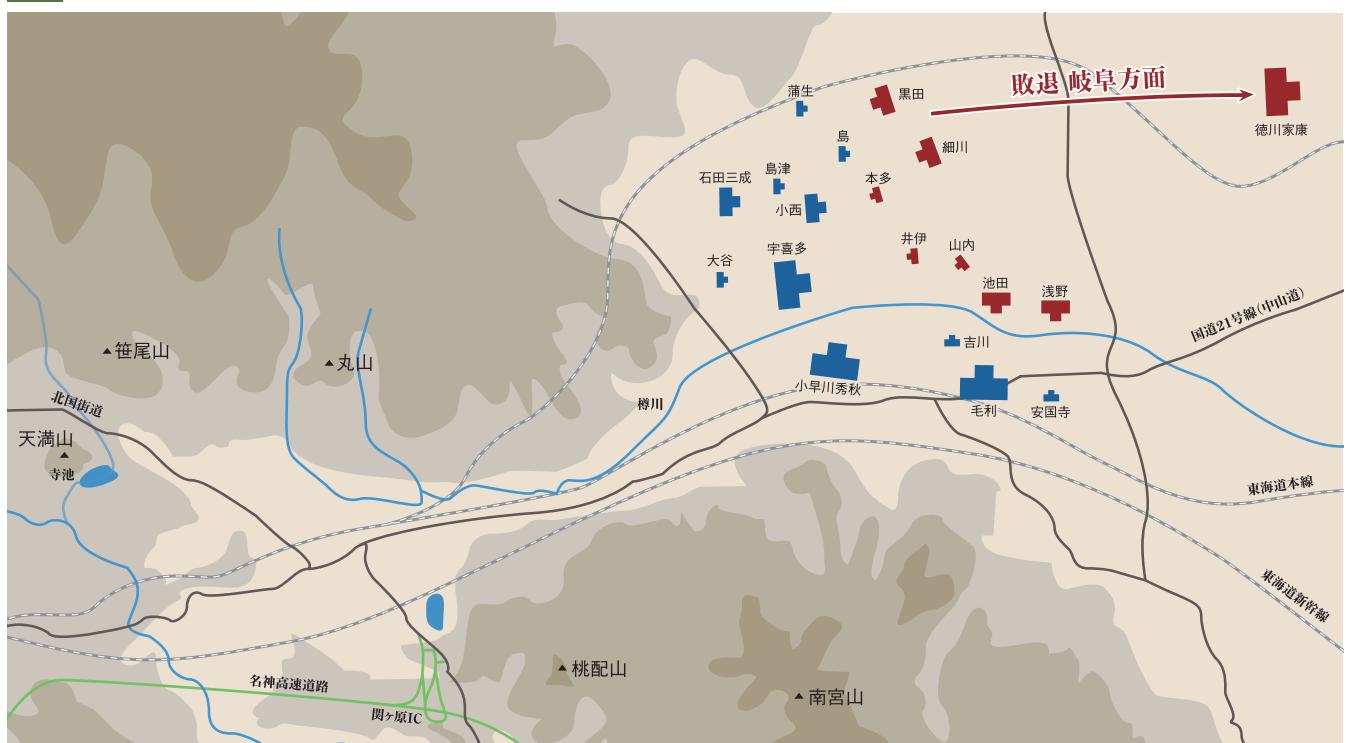


図6 〈ifワールド〉午後2時頃の布陣図 ※史実に反し、西軍が追撃した場合の布陣図



5 関ヶ原合戦の結末

話は戻るが、家康は敗走にあたって影武者を数名用意していた。これは、武田信玄がよく使った手で、鎧や大将の陣羽織、また大將軍旗(馬印)等々を、この影武者に与え、いかにも本物のごとく見せかけるのである。そして「我こそは徳川家康である。尋常に勝負せよ!」と叫ばせた。西軍の雑兵にとって敵の総大将の首を取れたら大手柄となる。

このようにして、西軍の追撃兵を足止めさせながら、自分はただひたすら岐阜城に向け少数の手勢のみで騎馬にて駆け抜けたのである。

特に、毛利勢の追撃は凄まじいものであった。今まで静観していた負い目もあり将兵の士気は高かった。主君毛利輝元が西軍の総大将として、大坂城にいるため、ここで軍功をあげたいという各兵士の思惑もあり、執拗に追撃をしてきたのである。

しかし、東軍の池田輝政軍四千五百は、毛利秀元勢一万と安国寺恵瓊一千八百に長宗我部六千五百の攻撃に対し、一歩も引かず防戦した(図4参照)。輝政は鉄砲隊を駆使する一方で、徒歩長槍隊に対しては「退却するものは、この輝政が成敗するぞ。一歩も引いてはならぬ。一人でも多く敵を討ち倒せば、出世も褒美も思いのままぞ。踏ん張れ!」と将兵を奮起させていた。

一方、浅野幸長六千五百と山内一豊二千と蜂須賀勢の兵は、毛利秀元勢の別働隊五千と吉川勢三千と長束勢一千五百に対して正面攻撃を仕掛けた。とりあえず家康が逃げ延びるまでの時間稼ぎである。「攻撃は最大の防御なり」を実戦したのである。

山内一豊勢も蜂須賀至鎮勢も、石田三成本隊や宇喜多軍・島津軍がすぐそこまで迫っていることはわかっていた。

池田輝政にしても浅野幸長・山内一豊にしても直参の家康の家来ではない。各々がしんがりを果たしつつ、

犠牲を最小限に抑えた退却をどのようにするかを思案していた。そこへ各隊に伝令が、

「無事、家康公脱出なされました」

との報がほぼ同時に入った。そこで、池田・浅野それに、山内・蜂須賀勢は追撃をかわしながら岐阜城へ退却した。三成は

「家康め。こんなに後詰に兵を裂いておったか。臆病者め! 総大将が早々と逃げ出すとは、あやつの威光もこれまでだ」

と叫んだ。

西軍は、宇喜多秀家や島津義弘の意見を入れ、追撃を美濃赤坂辺りで一旦中止した。そして、今後の行動について赤坂で軍議を開いたのである。

まず、東軍の戦力確認をした。東軍の主力部隊の犠牲は

- 福島正則戦死、軍は壊滅。
- 京極高知戦死、軍は壊滅。
- 藤堂高虎戦死、軍は壊滅。
- 加藤嘉明・竹中重門・戸川達安・田中吉政・筒井定次戦死、軍もすべて壊滅。

これらの武将は皆、秀吉の忠実な家臣で、豊臣恩顧の大名たちであった。前線部隊はほぼ全滅に近かった。

残る兵は、家康本隊三万・黒田・細川勢の生き残りを合わせても三万一千ほどに満たなかった。西軍の五万には到底かなわない兵力となっていた(図6参照)。

さて西軍の軍議ではどんなことが決まったのであろうか。宇喜多秀家の意見は

「ここで、秀頼公と総大将の毛利輝元公を大垣城にお迎えしたい。そうすれば黒田・細川をはじめ豊臣恩顧の大名は、戦いの大義名分を失い賊軍になるのを避け、投降するはずである」

これに対し、毛利秀元(毛利輝元のいとこで本家に対し分家にあたる)は、

「家康の息の根を止めるには、このまま岐阜城を取り

囲み総攻撃をすべきと進言致しうござる。この機を逃せば家康を捕らえることは、もっと困難を極めることになりましょう」

大谷吉継殿は、どうお考えでござるかと三成が意見を求めた。

「私は、宇喜多殿に賛成でござる。家康は今回の戦さで天下の公儀を失ってござる。いずれ孤立し関東の片田舎で当面は動けますまい、じっくり料理すればよいから存する。いまは、東軍に味方した大名の取調べをし、秀頼公への戦勝報告と、支配体制の確立をなさることが急務と考えます」

島津義弘は

「今、関ヶ原だけでなく全国で東軍派大名と西軍派大名が戦っている。我が薩摩も加藤清正（関ヶ原の合戦に参加せず東軍派として西軍派大名の留守城を攻撃していた）と黒田官兵衛（黒田長政の実父で、秀吉の軍師として天下統一に貢献。しかし、今は隠居中）が、わしが関ヶ原に参戦している内に領国である薩摩を狙つておるとの知らせが入っている。まずは、帰国致したい。また、岐阜城となると難攻不落の要害である。家康に籠城されれば、我らが取り囲んでも容易には落とせませぬ。また、秀忠軍三万七千の徳川主力部隊が馬籠までできていること、我が包囲網の背後を包囲されたら挟み撃ちとなり当方の損害は甚大となりましょう。深追いせずほっとけば、関東に引き上げ当面防備固めで動けますまい」

小西行長は

「大坂城に戻り、天下に公儀を示すことによって全国で東軍派大名と西軍派大名の争いをやめさせねばならぬと存する。西軍大名が一致団結して秀頼公を担げば戦いはおのずと止むであろう」

石田三成は、主要の武将の考え方を一通り聴いた後、「各々方のご存念ごもっともと考える。僭越ではあるがこの三成の存念を聞いていただきたい。わしは、毛利秀元殿と同じ考え方を持っております。家康は太閤殿下のお定めになったご定法破りを行ったうえ、五大老・五奉

行の政治体制が在りながら、相談もなくあたかも自らの政権のごとく振まっていること、許しがたし。

各々方も、戦さの前に十三箇条の家康の法度違反と横暴な振る舞いについてわが書状にてしたためた故ご承知と存する。このまま家康の横暴を許せば、豊臣政権は家康に乗っ取られること必定でござる。ここで、家康が天下を乗っ取ろうとしている以上、これを倒さねばまた天下の大乱が起り民衆に難儀がおよぶであろう。そこで、わしと宇喜多秀家殿とで大坂に赴き戦勝報告と同時に家康を支持し東軍に属した大名の仕置きをいかが致すかを、淀殿や秀頼公それに総大将である毛利輝元公のご意向を伺うことにする。そして、家康の追捕勢の総大将を小早川秀秋殿とし、副将に島津殿と毛利秀元殿になっていただき、家康の籠もる岐阜城を包囲し、家康の首を挙げていただきたいと考えるが如何でござろうか」

この提案に対し、西軍の大名は異議なく同意した。

次回後編では、秀吉公亡きあとの豊臣政権の支配体制は、どのようなものになるのか。また、このifのようになっていたら今の日本はどんな国になっていたらどうか等々、歴史のクライマックスに迫りたい。

〈参考文献〉

- 「石田三成」 三池純正 宮葉出版社
- 「大逆説! 関ヶ原合戦」 志茂田景樹 光文社
- 「物語 日本の歴史」 笠原一男 木耳社
- 「武将列伝」 海音寺潮五郎 文春文庫
- 「異聞関ヶ原合戦」 古川薰 文芸春秋
- 「反関ヶ原」 工藤章與 学研
- 「敗者から見た関ヶ原合戦」 三池純正 洋泉社